

第7回 「日本語大賞」

テーマ「^{わたし}私が^{つか}使いたい^{ことば}言葉」



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

虹色の言葉

東京都

和光高等学校

2年 多田 悠歩

東京都 和光高等学校 二年
多田 悠歩（ただ・ゆうほ）

その人の「おはようございます」に毎朝元気をもらう。近所の交番のおまわりさん。中学生の頃、盗難にあった自転車を見つけてくれたのもこの人だった。声が大きいから挨拶にもパワーがある。来年には他の交番へ異動になるらしい。寂しくなるけど、おはようのパワーは僕の中にずっとある。次に来るおまわりさんには、僕の方からおはようございますを伝えよう。

その人は、いつも「お疲れ様です」と笑顔してくれる。学校からの帰り道、マンション建設現場の警備員のおじさん。僕だけじゃない。見てみると、通り過ぎる人みんなにお疲れ様ですと声をかけている。ほとんどの人は無視していくけれど、おじさんは笑顔を絶やさずに、お疲れ様を言い続けている。八月の炎天下、僕からもおじさんにお疲れ様を言わずにはいられない。マンションが建てば、もう会うこともない。だけど、交わした言葉の記憶は残る。お疲れ様の言葉と共に、おじさんの笑顔も忘れない。

また、その人は、僕の友達。彼はすぐに「ありがとう」を言う。

「そんなにありがとうを安売りしない方がいいよ。本当にありがとうって思った時にだけ言えばいいんだよ」
と僕が言うと、

「いつだって、本当に心からありがとうって思ってるよ」
と笑っていた。そうなのか。彼の中には「ありがとう」が溢れているんだな。だから、みんなにいつも素敵な笑顔でいられるんだな。僕も彼にありがとうを返そう。僕の友達でいてくれてありがとう。

その人は、僕のおばあちゃんだった。おばあちゃんは、長い間入院していた。お見舞いに行くと、いつも家に帰りたいと駄々をこねていた。「いつになったら、おかえりって迎えてもらえるかねえ」と言っていた。両親が働いていたせいか、おばあちゃんと遊んだ思い出がたくさんある。僕もおばあちゃんが、ただいまって帰って来る日をずっと待っていたけれど、その日はやってこなかった。僕はいま、お仏壇に向かって「おかえり」と手を合わせている。おばあちゃんに届くように、手を合わせている。

その人は、今日も「いつてらっしやい」と手を振っている。僕のお母さん。三階のベランダから、大きな声でいつてらっしやいと手を振っている。ついさつき出かける前に喧嘩したばかりなのに、と思いつながら僕もつい振りかえってしまう。その時見上げた空は真っ青で、口喧嘩のイライラも空へと消えていく。「いつてきます」と素直に言えた。

毎日何気なく使っている挨拶は、相手を気遣う言葉で、「おはよう」から「おやすみ」まで、相手が元気でいることを案じたり、一日を無事に過ごせたことへの感謝の気持ちを表すものだと思う。しかし最近では、「おはよう」さえも言えない人もいる。気遣う気持ちにはあるのだろうけど、言葉にしなければ伝わらないこともたくさんある。一人一人に個性があるように、挨拶にも個性がある。違った色を持っている。みんながその色を出し合えば、灰色の空にも七色の虹がかかるだろう。そんな虹がかかれば、争い事もなくなると思っている。